



〒892-0841
鹿児島市照国町13-42
カトリック鹿児島教区
電話099（226）5100
振込口座 02030-2-8359
編集発行 教区広報部
1部60円年間千共1100円

道 標



自然と人間

―被造物を大切に―する世界祈願日に寄せて―

鹿児島教区司教 中野 裕 明

教区の皆さま、お元気で
しょうか。

日本の教会は、9月第1
日曜日を「被造物を大切に
する世界祈願日」と命名

し、「地球規模の環境悪化
が進む中、自然を破壊する
ことなく、『私たち皆の
家』である地球を大切に
し、調和のうちに発展して
いくことができるよう」祈
ることを奨励しています。

この意向を実践するために
必要な考え方（理論）につ
いてお話しします。

聖書によりますと、自然
界と人間の関係性は創世記
にあります。

「初めに、神は天地を創
造された。」（創世記1・
1）

さらに、「神は彼らを祝
福して言われた。『産め
よ、増えよ、地に満ちて、
地を従わせよ。海の魚、空
の鳥、地の上を這う生き物
すべてを支配せよ。』」（
同上・28）

つまり神は、自然界のす
べてものを造り、それらを
治める使命と権限を人間に
与えた、と解釈できます。

ところで、人間は自然界
と同じ生物なので、自然界
と共存せざるを得ず、自然

界を完全に支配することは
できません。しかし、人間
は長い時間をかけて、自然
界から学びながら「文化」
を発展させてきました。

「文化」は英語でカルチ
ャー（Culture）と言い、
ラテン語のクルトゥス
（Cultus）に由来していま
す。このクルトゥスは元
来、耕作を意味しており、
そこから、生活習慣、教
養、恭順という精神性の高
揚を表現する言葉にまで発
展し、最終的には祭儀とい
う宗教用語に用いられるよ
うになりました。「マリア
信心」の信心は、このクル
トゥスの和訳です。

一方、人間の理性は、そ
の歴史の課程で科学技術を
発明し、いわゆる「文明」
を発展させてきました。文
明は英語でシヴィライゼー
ション（Civilization）と言
います。要するに人間が集
合する都市化であります。
それが発展して、国家がで
きます。そして国家は、土
地を支配し、自然界と人間
を支配するようになりま
す。従って「文明の発展の
基礎にあるのは科学技術で
ある」と言っても過言では
ありません。

さて、「科学技術が最高
度に発展してきている」と
認知されている今日、いま
だに統治できていないのが
この自然界です。人間の命
を脅かす病原菌や自然災害
に対して、国家はしきりに
科学技術への信頼を人間に
宣伝しています。あたかも
人間こそがこの地球上の完
全な支配者であるかのよう
に。

教会が今日、全人類に警
鐘を鳴らしているのは、

8月15日（金）夕方、キ
リスト教伝来記念祭がザビ
エル教会であり、100人
余りが参列した。

今年の記念祭には、聖ザ
ベリオ宣教会所属でかつて

宣教師マゾッキ神父が講話
今年のキリスト教伝来記念祭

大隅地区、熊毛地区で宣教
司牧に尽力したルチアノ・
マゾッキ神父（86歳）がイ
タリアから若い司祭6人と
ともに駆けつけてくれた。

種子島教会建設に当たり

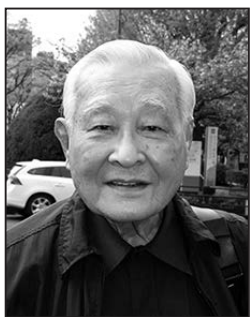
1985年に宣教奉仕者に
選任された。

その後は終身助祭候補者
（2005年2月）とな
り、司教区昇格50周年の記
念ミサ（2005年9月19
日）の中で、昨年1月に帰

月14日に台湾で生を受け、
1945年鹿児島県立第二
中学校卒業後、通信省（後
の電気通信省、日本電信電
話公社）に入り九州電気通
信局管内の諸施設で無線技
術者として働く。グレゴリ
アン聖歌に興味があったこ
とで教会の門を叩いた桃蘭
さんは1949年12月に自
らも建設の手伝いをした2
代目ザビエル教会で受洗
し、受洗後は青年、壮年の
リーダー格として活躍し、

祭（鴨池教会）が8月5日
（火）午後8時頃、腎不全
のため入院先の病院で亡く
なった。97歳だった。

桃蘭さんは1927年9



ペトロ桃蘭淳一郎助祭帰天

教会音楽を愛し晩年は祈る姿で手本に

祭（鴨池教会）が8月5日
（火）午後8時頃、腎不全
のため入院先の病院で亡く
なった。97歳だった。

桃蘭さんは1927年9

月14日に台湾で生を受け、
1945年鹿児島県立第二
中学校卒業後、通信省（後
の電気通信省、日本電信電
話公社）に入り九州電気通
信局管内の諸施設で無線技
術者として働く。グレゴリ
アン聖歌に興味があったこ
とで教会の門を叩いた桃蘭
さんは1949年12月に自
らも建設の手伝いをした2
代目ザビエル教会で受洗
し、受洗後は青年、壮年の
リーダー格として活躍し、



泉浩二神父主司式の葬儀ミサ

天した久保俊弘さんととも
に教区初の終身助祭に叙階
された。叙階されてからは
主に鴨池教会で聖歌隊の指
導、カテキスタとして手腕
を発揮したほか、教区のエ
キメニズム担当としても
働いた。

その桃蘭助祭の通夜は8
月7日（木）夜、鴨池教会
であり100人を超える信
者が集まった。説教の中で
主任司祭の李秉徳神父は
「体調を崩しここ数年は助
祭としての働きはなかなか
できないでいたが、祈る姿
をみんなに見せることで立
派な働きをしてくれた」と
感謝の言葉を述べた。

翌日8日（金）午前11時



マゾッキ神父

自らアルバイトに精を出し
その資金を調達した熱い宣
教師マゾッキ神父は、午後
4時から「ザビエルと諸宗
教対話」の演題で講話し、
「私たちはまず自分たちの
信仰がイエスに根づいてい
ることを確認し、その上で
攻撃するのではなく、他の
宗教にも尊敬の心を持って
理解しようとすることが大
切」と訴えた。

その後の午後5時からの
聖母マリアの被昇天ミサで
は、ザビエルのもたらした
キリスト教が真の平和につ
ながることを再確認し、戦
後80年の終戦記念の日に世
界の平和のために祈りがさ
げられた。

このミサには18人の司祭
と助祭1人が中野司教を囲
んでミサを進めた。ルカ福

音書の朗読後に説教した中
野司教は、マゾッキ神父の
講話をもとに、他宗教への
理解もさることながら国際
化が進み海外からの信者た
ちで形成されるようになって
た教区、小教区での問題に
触れ「様々な国々の文化を
理解し、尊敬することは平
和の種撒きになる」とメッ
セージを送った。

ミサ後は教会ホールで茶
話会があり、司教やマゾッ
キ神父らを囲んで交流のひ
とときがもたれた。



から鴨池教会で執り行われ
た葬儀ミサと告別式は、司
教総代理である泉浩二神父
の主司式、李秉徳神父と7
人の司祭による共同司式で
行われ、祭壇で奉仕した久
山元太郎助祭のほか多数の
親族や鴨池教会内外からの
多くの信徒が参列した。

また式中の聖歌は生前の
桃蘭助祭が指導していたグ
レゴリアン聖歌隊のメンバ
ーがリードした。参列者は
家庭と社会の中で、そして
鹿児島教区司教の草創期から
典礼、カテキーシス、信徒
使徒職、助祭職と様々な分
野で活躍した桃蘭助祭の言
葉と人柄を忍びつつ最後の
別れを行った。

古巣馨神父から宝物もらった

鹿児島カトリック幼保連盟教職員研修会

鹿児島教区カトリック幼保連盟（会長・中野裕明司教）では、7月24日（木）と25日（金）の2日間、この時期恒例となっている「教職員研修大会」を実施した。会場は初日が鹿児島純心学園聖堂、2日目はザビエル教会聖堂でインターネット参加も利用しての研修会となった。今回の研修会の講師には長崎大司教区から古巣馨神父（長崎純心大学教授）が招かれた。講話のテーマは「いのちからのちへ」。

シスター水間なるみ

「子どもたちのいのちがより一層かがやくために」を大会テーマに開催された鹿児島教区カトリック幼保連盟第5回教職員研修会は、「希望の巡礼者」の聖年の旗を高く掲げるこの年に相応しく、純心高校聖堂とザビエル教会が会場でした。私自身も引き込まれる様に会場入りし、共に集う教職員に祝福の祈りをささげ、2日間に渡って、古巣神父様の講演をお聞きするお恵みに浴しました。



次から次に引用され紹介される言葉は、私たちの身近な生活の中にこんなにも心の目を開かせる題材、（古巣神父様の言葉をお借りすれば）「預言者」の語りが溢れている事に気付かされ、心のアンテナを張る生き方の豊かさ、に気付かされました。幼い魂にとつて「幼少期

に誰と出会うかが「大切。そして私たちは「出会うべき人」だと聞かされた時、さて私自身の教育は？と

考え、教皇フランシスコが生前示した「子ども達には、対話という武器」を持つように教育して下さい」の未来に繋がる希望の教育を回想しました。

古巣神父様の言葉を借りて表現すると、子ども達一人ひとりの命がより一層輝くために、いじらしい優しさを持つてキリストのごとく個々の心を大切に幼児教育に努める事であろう。

「あの人のように」なりたくて、あの人の後を追っていたら、あの人の前にキリストがいた」（星野富弘『種蒔きもせず』）。

これこそが、キリスト教徒の生きた宣教のあり方なのでしよう。

「あの人の前にキリストが居た」の体験は、私自身もいくつもしてきた。次の段階に進みたいものだ。（イエスのカリタス修道女会 笠利聖母保育園 園長）

田島信三

研修を通じて、自身の保育者としての役割や人生の意義について深く考える機会をいただきました。特に、古巣神父様のお話からは、幼少期の体験や人との出会いが、その後の人生に大きな影響を与えることを改めて実感しました。

神父様の幼少期の体験談から、子どもの心と真剣に向き合ってくれた先生の存在が、人生を救う光となったことに深く感銘を受けました。この経験から、子ども一人ひとりの思いを大切に

にし、寄り添うことができると感じました。

子どもたちの精神的な基盤が形成される幼少期に、大人が与える影響は計り知れません。モンテッソーリ教育の考え方も通じる「子どもの今を生きる姿」を尊重し、子どもたちから学び続ける姿勢を大切にしたいと思っています。

「人は誰と出会うかで人生が大きく変わる」という言葉は、私の人生を振り返る上で深く心に響きました。保育者として働く今の環境に導かれたこと、そして

聖心教会主催の聖年巡礼

徳之島巡礼に参加して

8月11日（月）は心待ちにしていた徳之島巡礼でした。共同体みんなで出かける喜びで、聖心教会

で自身がカトリック幼稚園で働いていることにも、何か意味があるのではないかと改めて問いかけました。

「人間にとつて一番嬉しいことは誰かを喜ばせること」という言葉を胸に、常に自分自身に問いかけながら、子どもたちや周囲の人々を喜ばせる存在でありたいと思っています。

私のこれまでの人生において、目に見えない神様の存在や精神性を自然と受け継いできたと感じています。これは、私が出会った多くの方々が心からの愛情を持って私たちに接してく

（主任司祭・栃尾泰英神父様）が企画して下さった募集にいち早く申し込んだ。ゆつたりとした船旅に心も身体も癒やされながら徳新港に到着、そこではボスコ神父様（母間教会主任司祭、レデンプトール会）と池上終身助祭が迎えて下さった。

早速バスに乗り亀津教会へ出発。バスの中で池上助祭の愉快なガイドに大笑いしながら、楽しい時間を過ごすことができた。亀津教会では信徒の方々の温かいもてなしを受け、冷たいお茶とお菓子を頂いた。

聖年の巡礼指定教会「母間教会」では、ロザリオのお祈りと栃尾神父様司式による荘厳な聖体賛美式にあり、聖年の祝福を頂いた後、感謝の祈りをささげた。また信徒の方々が準備して下さったお弁当、美味しいトロピカルフルーツが並ぶ豪華な昼食に舌鼓を打

ださったからではないかと思ひます。現代の子どもたちが「再生された声の洪水」の中で生きる中、私たちは「静けさ」を与えられる環境を整え、子どもたちの内面的な成長を支える必要があります。目に見えない大切なものを伝えるという使命を心に留め、子どもたちの命がより一層輝くために、自分に何ができるのかを考え続け、実践していきたいと思っています。

（鹿屋カトリック幼稚園 園長）



つことだった。信徒の方々の心のこもったおもてなしに感謝。

また美しい作りの平土野教会でお祈りをしたところ、ここでも信徒の方がアイスクリームとコスモスの種をくれた。徳之島教会の信徒の信仰あふれる姿に心は感謝でいっぱいになった。

徳之島はどこまでも広がる緑豊かなサトウキビ畑から収穫される太陽の光をいっぱい受けた黒糖が有名。加えて風光明媚な観光スポットも見学でき、神様の創造のわざを賛美した。神様からのお恵みいっぱい。徳之島、この巡礼に参加して本当に良かった。聖年の年にこのようなお恵みを頂き、これから修道生活を楽しむもって過ごし、神様の愛を伝えていきたいと思う。

ボスコ神父様、池上助祭のたくさんの配慮に感謝。そして何よりもこのような巡礼を企画してくれた栃尾神父様に感謝。（イエスのカリタス修道女会平田修道院 シスターパウラ恵 美穂枝）

原爆体験と長崎の祈り

故・糸永真一司教のブログから

大浦天主堂

8月は戦争を想起し、平和を祈る季節である。6日の広島原爆から9日の長崎原爆を経て、15日の終戦記念日にいたる10日間は、日本の教会が設定した「カトリック平和旬間」でもある。今年は特に長崎における被爆体験を思い出している。

あの日の朝、わたしは大浦天主堂横の神学校にいた。爆心地から4・3キロのところにあるこの神学校は、キリスタン禁制の高札が撤去されてキリスト教信仰が解禁された2年後の1875（明治8）年に開設された木造4階建ての由緒ある校舎で、キリスタン復活後最初の日本人司祭たちをはじめ、全国の多くの司祭たちがここに学んだ。わたしは太平洋戦争が始

まった1941（昭和16）年にこの神学校に入学し、1945（昭和20）年3月に通学していた旧制中学を繰り上げ卒業した。続いていた三菱長崎造船所への学徒動員も7月いっぱい最終日、その日の朝早く、神学生としての新たな動員先の小さな木工所の入所式を終えたばかりだった。

入所式から帰宅してその日の朝刊に目を通した。一面には「広島に新型爆弾、甚大な被害」という見出しが躍っていた。それが広島に落ちた世界最初の原子爆弾であることを後で知った。長崎にもその新型爆弾が落とされようとしていることを知る由もない。その直後である。警戒警報のサイレンが鳴り、B29の爆音を聞いたのは。外に出て機影を探そうと目を上げた途端、ピカッと

強い閃光が走り、あわてて近くの防空壕に逃げ込んでしばらくすると、ドーンという轟音と共に爆風が壕の中に突っ込んできた。恐怖のあまりじっとしている

と、しばらくして天主堂の小聖堂の屋根が音を立てて落ちた。ようやく壕の外に出て浦上方面を見やると、一面の煙が街から稲佐山の山肌まで広がっていた。午後何時ごろであったか、爆心地近くの工場に動員されていた1人の神学生が担ぎ込まれた。見ると、真っ黒焦げでだれだか判別できない。両腕の皮膚は浮き上がり、足の裏の皮膚ははがれて垂れ下がっていた。声を掛け、返事を聞いて、ようやく一学年下の山田君であることが分かった。しばらくしてもう1人の神学生が近くの防空壕に倒れているとの通報があった。担架を担いで駆けつけてみると、それはパンツ一枚で筵に横たわっている石橋君であった。そのうち山野君も焼け爛れて帰ってきた。

3人の神学生はそれぞれ自分たちが掘った防空壕に収容され、形ばかりの看護を受けた。そして翌朝、石橋君がお父さんに看取られて息を引き取り、山野君は13日の晩、山田君は14日の朝早く亡くなった。この2人をわたしたちは神学校裏の丘にこの手で墓穴を掘り、埋葬した。

あの日から半年も過ぎたあるとき、神学校を訪ねてくだった永井隆博士から原子爆弾の仕組みについて説明を受けたことがある。「原子爆弾の原理は日本でも知られていた」と言い、マンガを描きながらの説明は分かりやすく、原爆についてのわたしの知識は今もそのときのままである。原爆の後、長崎のキリシタンは胸を打ちながら神のゆるしを願い、静かに世界平和を祈った。広島のようになぜ怒らないのかとの批判も聞こえてきたが、わたしたちは動じなかった。1981年に訪日した教皇ヨハネ・パウロ2世は、広島で「戦争は人間の仕業

です」と平和メッセージの冒頭で述べたが、まさにそのとおりで、詰まるどころすべて戦争は人類の罪の結果であり、わたしたちは敵味方の違いを超え、胸を打ちながら、悔い改めて神のゆるしを請わなければならないのである。

それと共に、長崎のキリシタンは原爆で受けた心身の痛みを罪の償いとして、また、世界平和のための尊いいけにえとして甘受し、キリストの十字架のいけにえに合わせて御父にささげたのである。わたしはこの長崎の祈りが好きだ。キリスト者にとつて世界平和への取り組みの第一歩は回心であり、キリストの平和の福音を宣べ伝えること自体が真の平和運動である。戦争の責任を他者または他国に転嫁して非難しあうことではなく、ゆるし合い、すべてを分かち合うことの中にこそ、真の精神的秩序、真の平和への道があることを、あらためて心に銘じたいと思う。

イグナチオの霊躁②7

紫原教会主任司祭 貴島丈弥



自分の姿

これからは霊躁での個人的な体験を書いてみたいと思っています。

ですがこれから霊躁を受けようとしている方々には妨げになるかもしれない。ですからそういう方々には読むことをお勧めしません。またあまりこういうことは分かち合うべきではないというアドバイスもフイリピンではもらいまし

た。しかし、もう書きたいこともありませんので霊躁中の体験を分かち合いたいと思います。

わたしは、特に30日の霊躁の準備もすることなく、不摂生な日常の延長で入ってしまったという原因もあり、規則的な生活に入るのが難しかったです。夜も寝つけず眠りの浅い状態が続いていたので、同伴シスターのアドバイスで1日5回の黙想から3回へ

と減らされました。第1週の罪の黙想はなかなかうまくいかずに長引いてしまいました。自分の罪に向き合いたくない、認めたくないといった思いも影響していたと今では思います。その中で覚えている黙想というのが、彫刻の黙想です。霊躁の本には書かれていませんが、イグナチオ以来、長い時間がたつていますので、多くの霊躁指導者たちが想像力を働かせて作り上げてきた手法の中の一つなのだと思います。

この黙想は、ある部屋の中で、彫刻家になりきって自分の像を彫り、そこへイエス様が入ってきてそれを見て何を言うのかというものです。最初、わたしは大きく勇ましいライオンの姿を彫りました。そこへイエス様が入ってきて「見違えたね」と言いました。その時の自分、とても自分自身が大きく見え、誇り高く感じました。しかし、その話を自信をもって指導者にする

と、もう一度同じ黙想をするように言われました。今度は、とてもみじめな思いのまま、自分自身を汚れた今にも死にそうな子犬の姿として彫りました。そこへイエス様が入ってくるのですが、今度は何も言われませんでした。同伴シスター

です」と平和メッセージの冒頭で述べたが、まさにそのとおりで、詰まるどころすべて戦争は人類の罪の結果であり、わたしたちは敵味方の違いを超え、胸を打ちながら、悔い改めて神のゆるしを請わなければならないのである。それと共に、長崎のキリシタンは原爆で受けた心身の痛みを罪の償いとして、また、世界平和のための尊いいけにえとして甘受し、キリストの十字架のいけにえに合わせて御父にささげたのである。わたしはこの長崎の祈りが好きだ。キリスト者にとつて世界平和への取り組みの第一歩は回心であり、キリストの平和の福音を宣べ伝えること自体が真の平和運動である。戦争の責任を他者または他国に転嫁して非難しあうことではなく、ゆるし合い、すべてを分かち合うことの中にこそ、真の精神的秩序、真の平和への道があることを、あらためて心に銘じたいと思う。

調理スタッフ募集

とうご支援ありがとう
ご支援調理スタッフ
ご協力募集しています。
とそこども食堂・貴島神父
TEL080 (9823) 5027

会と催し 9月

- 1日（月）川淵勇神父命日（1997年）
- 2日（火）コンベンツス・教区本部・10時
- ▼みことばを祈る集い・ザビエル教会・10時
- 6日（土）朴鎮亮神父叙階記念（2015年）
- 7日（日）年間第23主日
- ▼被造物を大切に

「回勅「ラウダート・シーとともに暮らす家を大切に」（2015年）で、全世界の人に向けて、エコロジー（自然保護）に取り組むよう訴えた教皇フランシスコは、東方正教会に倣って、環境保護のための助けを願う日をカトリック教会の暦に加えました。

地球規模の環境悪化が進む中、自然を破壊することなく、「わたしたち皆の家」である地球を大切にし、調和のうちに発展していくことができるよう、この日、全世界のカトリック教会で祈りがささげられます。いのちの与え主である神に賛美と感謝をささげるとともに、自然を大切に

方々を改める機会としていきたいものです。

▼8日（月）聖母マリアの誕生

▼7日（水）七田和三郎神父命日（1989年）

▼10日（土）中野アカデミー・教区本部・13時30分

▼14日（日）十字架称賛

▼15日（月）祖父母と高齢者のための世界祈願日

▼13日（土）青年会・教区本部・18時

▼14日（日）十字架称賛

▼15日（月）鹿児島教区司教座教会献堂記念日

▼19日（金）奄美宣教再開記念日

▼21日（日）四糸淳也助祭叙階記念（2008年）

▼22日（月）桃蘭淳一郎助祭叙階記念（2005年）

▼23日（火）年間第25主日

▼24日（水）朴昶奎神父叙階記念（2016年）

▼25日（木）李秉徳神父叙階記念（2017年）

▼26日（金）霧島彬神父霊名（聖ボグスワフ）

▼27日（土）ダニエル神父命日（2003年）

▼28日（日）バルビニ神父命日（2004年）

▼29日（月）山口愛次郎神父命日（1976年）

▼28日（日）メニッヒ神父叙階記念（1959年）

▼29日（月）年間第26主日

▼世界難民移住移動者の日（献金）

▼29日（月）聖ミカエル 聖ガブリエル 聖ラファエル大天使

▼ティエン神父霊名（聖ガブリエル）

▼四糸淳也助祭霊名（聖ガブリエル）

▼竹山昭神父命日（2019年）

【司教日程】2日コンベンツス、3日大阪、10日中野アカデミー、12日学校教育委員会、15日奄美宣教再開記念ミサ、17日中野アカデミー、24日中野アカデミー、25日玉里善き牧者幼稚園

祈りの意向

【教皇の意向】すべての被造物と私たちとの関係
【日本の教会】高齢者

ベトナムの青年たちに感動

今年もラバン祭で絆を確認し鹿児島教区の希望へ

8月10日（日）夕方、か
んまちあ（鹿児島市浜町）
で、ベトナムの聖母「ラバ
ン祭」のミサがささげられ
た。

ラバン祭は、タイソン朝
によるカトリック信者迫害
（1798年）から逃れ
て、ジャングルに避難した
信者たちの前にベトナムの

伝統的な衣装（アオザイ）
を着、幼子イエスを抱い
て、信者たちを励ましたと
される「聖母のご出現」に
感謝し、記念するもの。

会場となった「かんまち
あ」には、数日前の大雨に
よって寸断された道路や交
通機関の影響もあつて昨年
より少なかったものの県内



各地で働く100
人近いベトナムか
らの青年たちが集
まった。またこの
ミサには鹿児島で
暮らすフイリピン
ファミリーも数人
参加したほか、教
区内の20人ほどの
日本人信者たちの
姿も見られた。

午後4時からの
ミサは中野司教主
司式で、ベトナム
人の神父、タム
神父、タイエン
神父、韓国人の李
秉徳神父が共同司
式した。ベトナム

世界難民移住移動者の日=9月28日

「世界難民移住移動者の日」は、1970年に聖パウロ6世教皇が教皇庁移住・観光者司牧委員会（後に移住・移動者司牧評議会となり、現在は総合人間開発省に統合）を設立したことを受け、「各小教区とカトリック施設が、国籍を超えた神の国を求めて、真の信仰共同体を築き、全世界の人々と『ともに生きる』決意を新たにする日」として設立されました。

「世界難民移住移動者の日」には、おもに滞日・在日外国人、海外からの移住労働者、定住・条約難民、外国人船員や国際交通機関の乗組員とその家族のために「祈り・司牧的協力・献金」がささげられ、それらは日本カトリック難民移住移動者委員会を通じて、幅広く支援に役立てられています。



要 理

皆さんは学校で多くの科目を習ったり、課外活動をしたりしていると思います。一人ひとりに得意な科目や分野があり、反対にやりたくないと思えることもあるでしょう。好きなことばかりしていたとしても人間全体としての成長がないことは、好きな物ばかり食べていたら栄養が偏って健康を損なってしまうことと同じです。

私たちがたくさんさんの学びを通じてそれらを習得し、人生を豊かにするために何が必要だと思いますか。この答えは「達磨落とし」が教えてくれます。「達磨落

の青年たちで組織された聖歌隊は、ベトナム語の聖歌だけでなく日本語の聖歌も取り入れてミサを盛り上げ、朗読も第一朗読はベトナムの青年がベトナム語で、第二朗読は地元鹿児島で、若者が日本語でと国際色豊かなものとなった。

アン神父によるルカ福音書朗読後の説教で中野司教はイエスの時代のイスラエルの律法に触れ、「律法で大切なのは神と隣人に対する愛。ベトナムから日本に来た皆さんは、家族のために隣人のために故郷を離れて日本で働いている。日本は文化も違うし、言葉も違

う。もしかすると偏見を抱かれることもあるだろう。そんな時こそ教会に足を運び神と隣人を愛する行動を取ってほしい。そうすれば偏見も消えていく。皆さんの頑張りが無駄になることはない」とメッセージを送った。

ミサ後は参列者全員で、中野司教を囲んで記念撮影をし、その後は懇親会が開かれ交流のひとつが持たれた。

毎回のことながらベトナムからの青年たちの聖母への感謝と聖職者への尊敬に満ちた規律ある振る舞いは参列した日本人たちに感銘と希望を与えてくれる。

この日、ベトナムの若者たちはこのミサだけではなく、正午にはザビエル教会に集い「お告げの祈り」を唱え、その後はかんまちあ

に移動し、青年の集い、聖歌練習、ロザリオの祈りと聖母行列を行うという内容たっぷりのものだった。

神の計りに恵まれた大熊小教区の堅信式

6月15日（日）、三位一体の主日にお2人の司教さまから堅信式をして頂きました。司式をしてくださったのは中野司教さま、郡山名誉司教さま。厳か中にも和やかな式典となりました。



は司教さまが聖書の中の「みことば」を引用してお話ししてくださいました。低学年には「こじか」を参考にリーダーと一緒に学びを進めて来ました。

堅信の学びでは郡山司教さまがよく話される信仰の3点セット「放蕩息子のたとえばなし」「ザカカイの回心」「十字架のイエスさ

ま」の話をしてくださいました。これらのお話で、神さまの愛を身近に感じることでできたのではないかと思います。

ごミサの後に信徒会館で中野司教さま、郡山司教さま、信徒の皆さまと楽しい会食を持ち、みんなでお祝いしました。（報告・教会学校担当）

連合壮年会主催 黙想会

日時：10月25日（土）15時
場所：ザビエル教会
指導：小隈憲士神父
※講話とミサがあります。どなたでも参加可能です。

イエス様の愛に貫かれる

ります。そこで達磨の頭のてっぺんにも円柱の中心にも丸い穴が開いているのです。

それは達磨の頭から円柱のすべてをハンマーの柄で突き刺すためです。こうすると全体が固定され、形が整い微動だにしません。これと同じで皆さん

の昔から今まで、そしてこれからからのたくさんの学びに信仰というものを突き通さなければそのすべてがグラグラになってしまいます。

皆さんはこれからの人生の中で様々なことを学びます。それらがきちんと身に付き、人間として品よく美しくなるためにも神様やイエス様の愛に貫かれなくてはなりません。そのために「青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ。」という聖書の言葉を忘れないでいてください（コヘレト12・1a）。

